ハレ時々市役所、のち美術館

～公共空間の使い重ねによる新たなビルディングタイプの提案～

❶公共建築の公共性

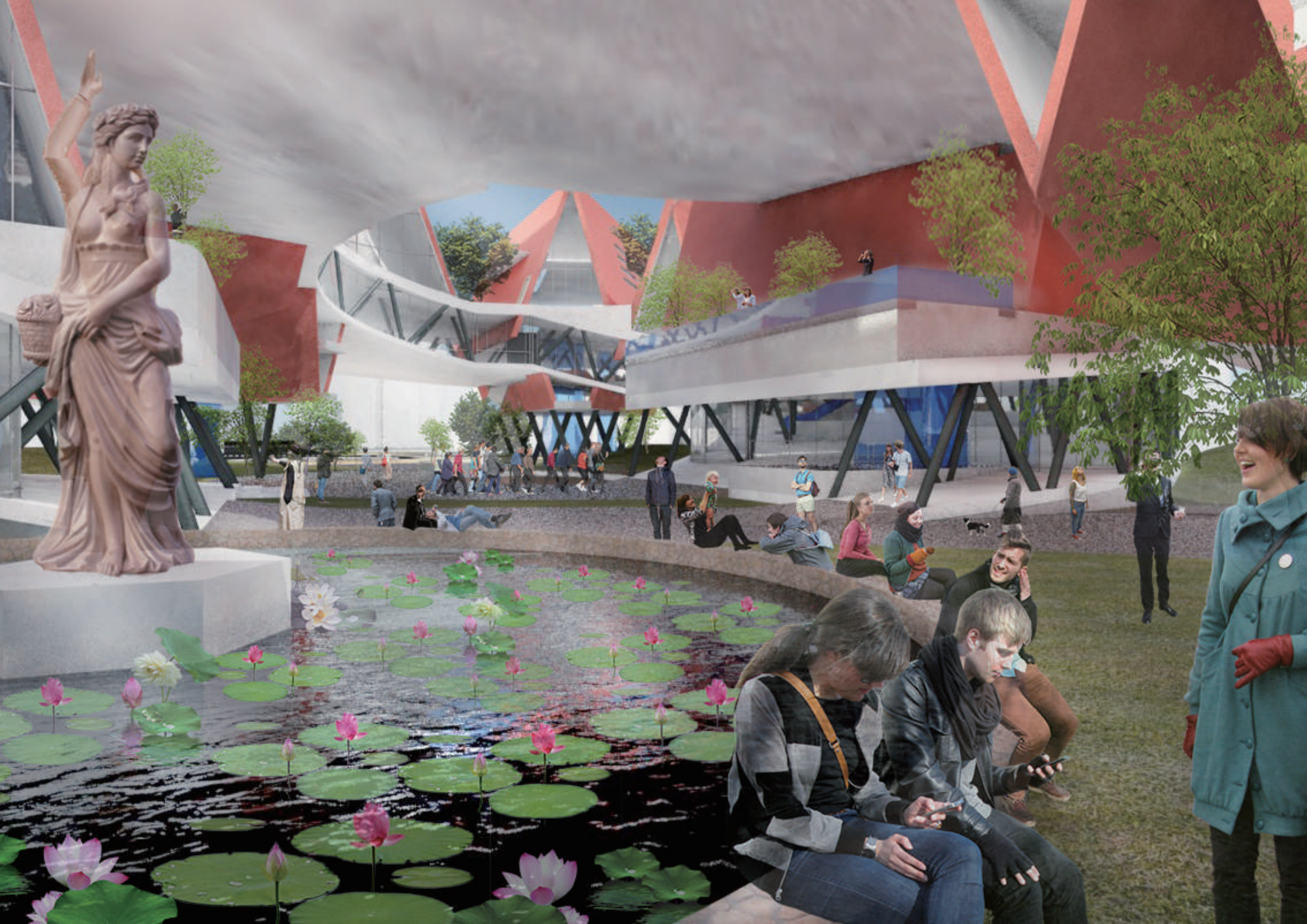
公共建築ではその敷地において誰もが寝転ぶことさえ許され、それぞれが思い思いの時間を過ごしている。そんな姿が望ましいはずだ。そこでは今まで相容れなかったもの、例えば公と私、外と内、ジェンダー、ジェネレーション…そういったものが混ざり合う可能性がある。そうして人々に使い倒され、使い重ねられていく建築がこれからの時代には必要だ。やがて私が巡り合った岡山市の計画敷地には、建て替えが決定している市役所が建っていたのである。

❷市役所はカタチを求めている

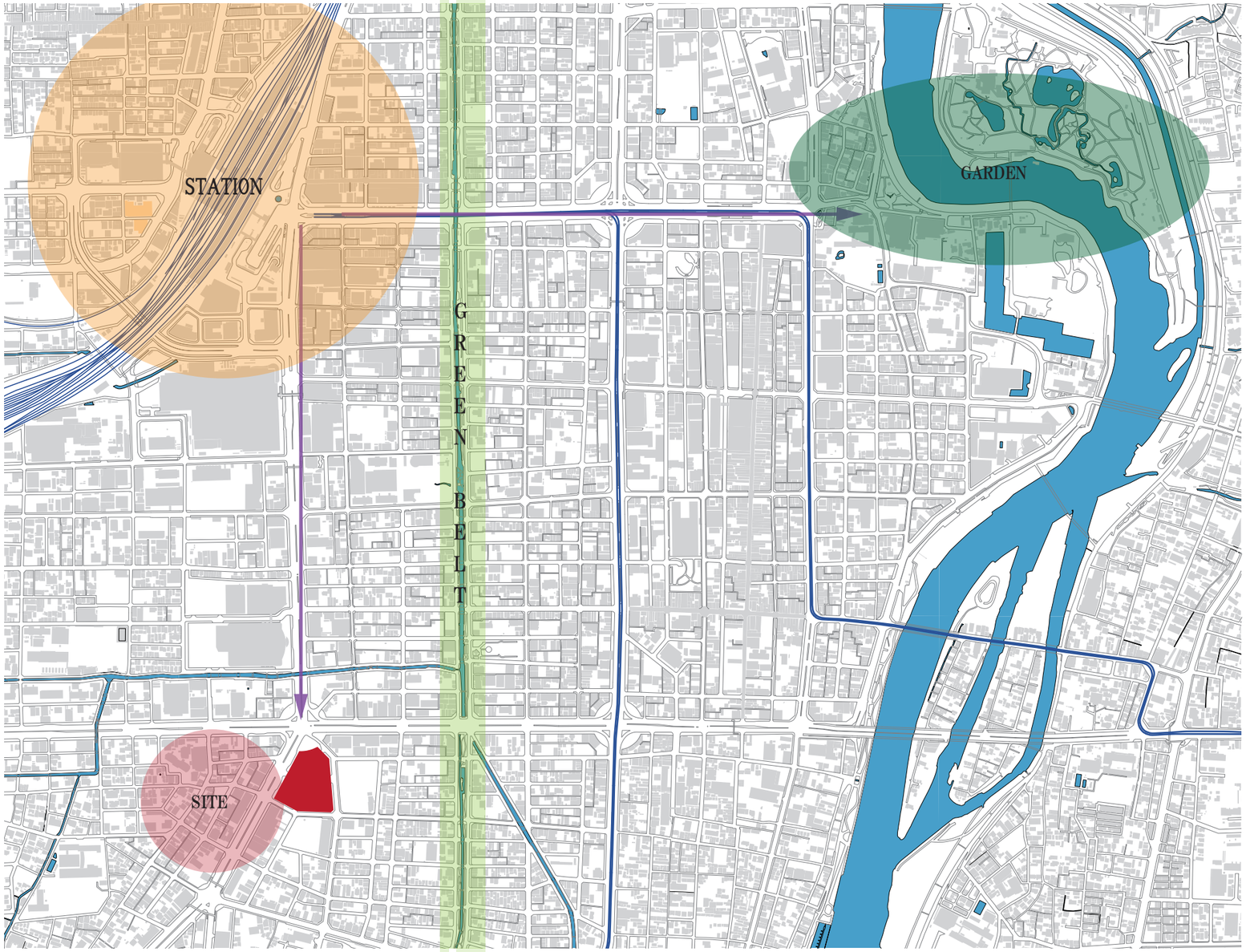
50 年後の市役所はどうなっているだろうか。激動の時代の渦中で、私たちは思っていたよりもずっと「離れていても、何でもできる」ことを学んだのではないだろうか。市役所も例外ではない。オンライン上での手続きも増え、滞在時間はぐっと短くなってきている。益々利便化する一方で、ハードとしての市役所の存在意義が危ぶまれることを一つ問題提起としたい。かつて庁舎建築は街のシンボルであり、拠り所であり、市民の誇りとなることが目指されていた。本計画では市役所に美術館というカタチを与えると共に、市民の日常生活と共にある新たな公共建築のタイプとして提案する。

❸使い重ねが歴史を刻む

市役所は日常生活の中で人を集める、公共空間としてのポテンシャルがある。美術館は市民の生活に彩りを与え、これらは相互に良い影響を及ぼしあう。益々市役所の規模縮小化が進み、やがてそのカタチを失ってもこの建築は人々の拠り所として、街に残り続ける。そこではその歴史を伝える鑑賞空間として街のアイデンティティを育て続け、美術館というよりは広義的な意味での博物館として人々の記憶の中にそのカタチが刻まれていくだろう。



転車を除く

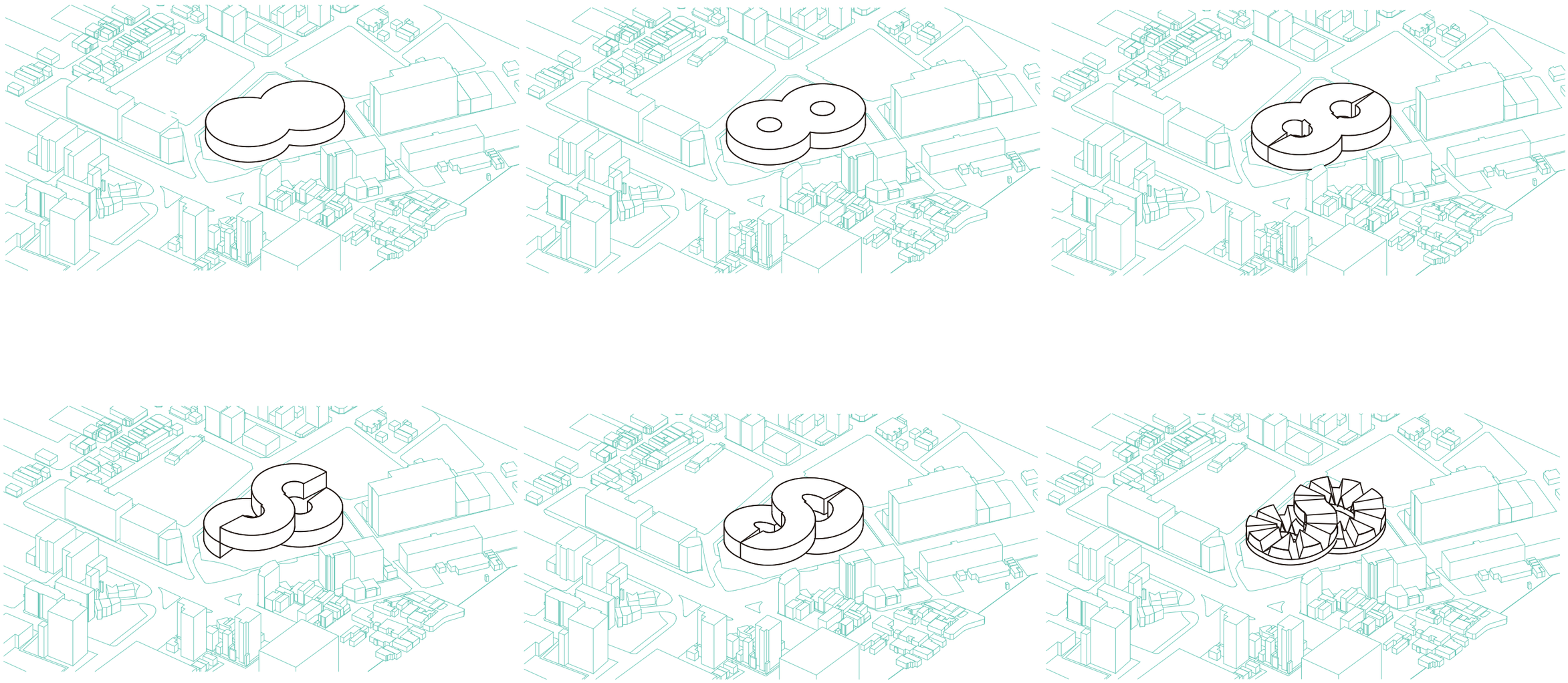


緑豊かな都市環境ー後楽園と西川緑道公園ー

岡山市は中国・四国地方最大の都市雇用圏を持つ政令指定都市であり、近年は移住先としても注目を集める。交通の要所である岡山駅を中心とし、東西の桃太郎大通り、南北の市役所筋を中心に繁華街が広がる。桃太郎大通りの突き当りには岡山城と後楽園が位置し、旭川と共に自然豊かな公共空間として地元住民にも観光客にも愛されるエリアになっている。都市と自然の調和環境が構築されており、市民は都会に押し込められている感覚を持つことなく、のびのびと人間らしい生活を送ることができる。

市役所まで人が南下してこない！ー駅前の人口過多問題ー

後楽園の存在によって緑あふれる街が実現されている東西の広がりに対して、市役所筋には高層ビルが立ち並び、突き当りの現市役所は駅方面からのアイストップとしてその威厳あるファサードを強調している。オフィス街としての性格が強く、市役所以南は住宅街へと徐々にスケールダウンしていく構図が読み取れる。現状、人々の居場所は駅の南に隣接する中四国最大規模のイオンモールが中心であり、大型商業施設の完成はそれ以南に人々が流れず駅周辺が人口過多になる大きな要因となってしまった。



建ち方について

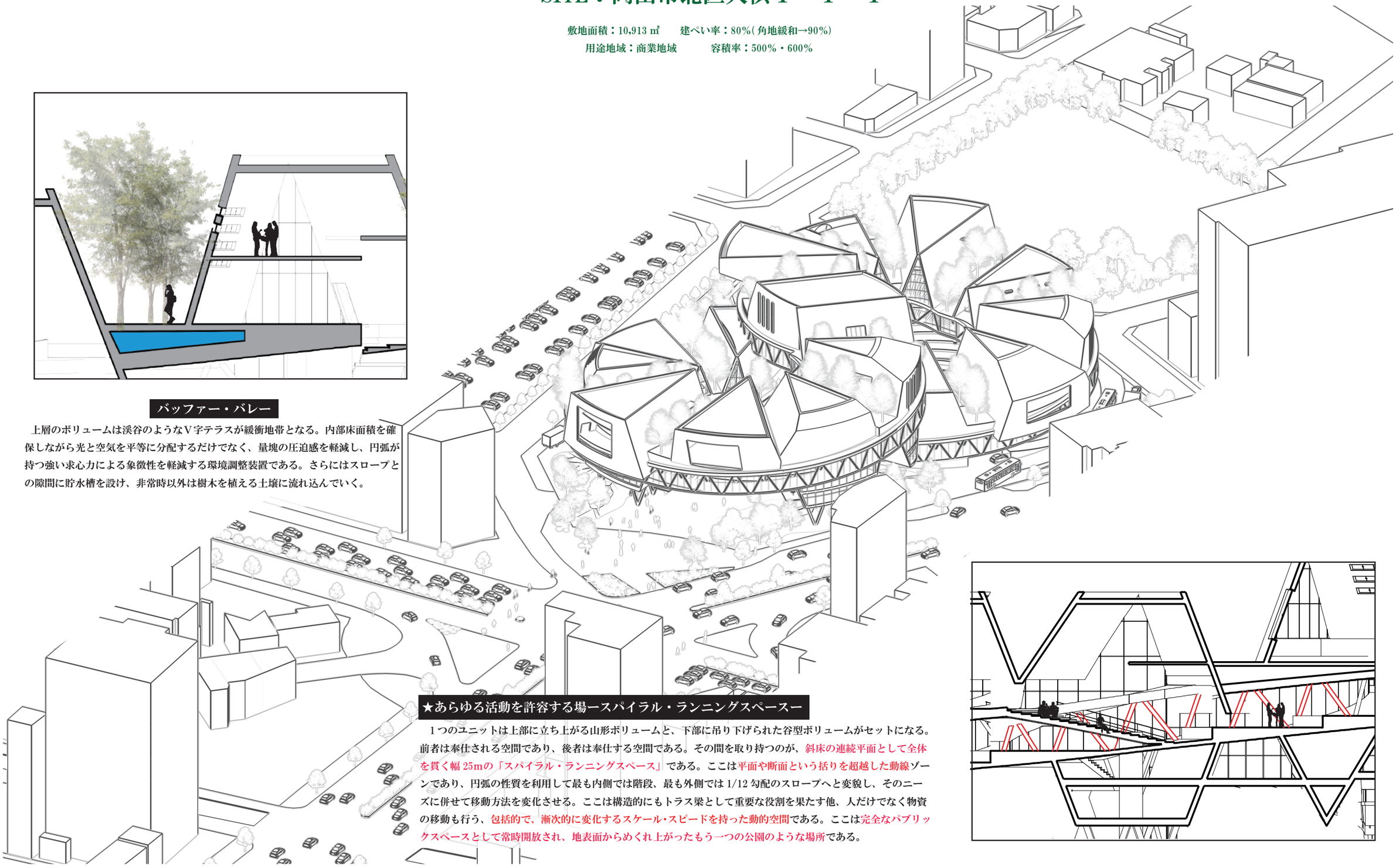
敷地に舞い降りた二つの円形ボリュームは互いに身を寄せ合い、一つのかたちを形成する。それぞれの中心に空の吹き抜けを用意して、スリットを設けてかたちを開く。半円にカットされたボリュームは段違いに積み重なり、ここで南北に空気を通す構えができた。段差を解消するように連続させたかたちは結果としてメビウスの輪のような形態であった。ここからV字スリットを入れ扇形平面の上層ボリュームを定義する。全面接道地における、表裏のない建築である。

SITE：岡山市北区大供１－１－１

敷地面積：10,913 ㎡　　建ぺい率：80%（角地緩和→90%）
用途地域：商業地域　　容積率：500%・600%

バッファー・バレー

上層のボリュームは渓谷のようなＶ字テラスが緩衝地帯となる。内部床面積を確保しながら光と空気を平等に分配するだけでなく、量塊の圧迫感を軽減し、円弧が持つ強い求心力による象徴性を軽減する環境調整装置である。さらにはスロープとの隙間に貯水槽を設け、非常時以外は樹木を植える土壌に流れ込んでいく。



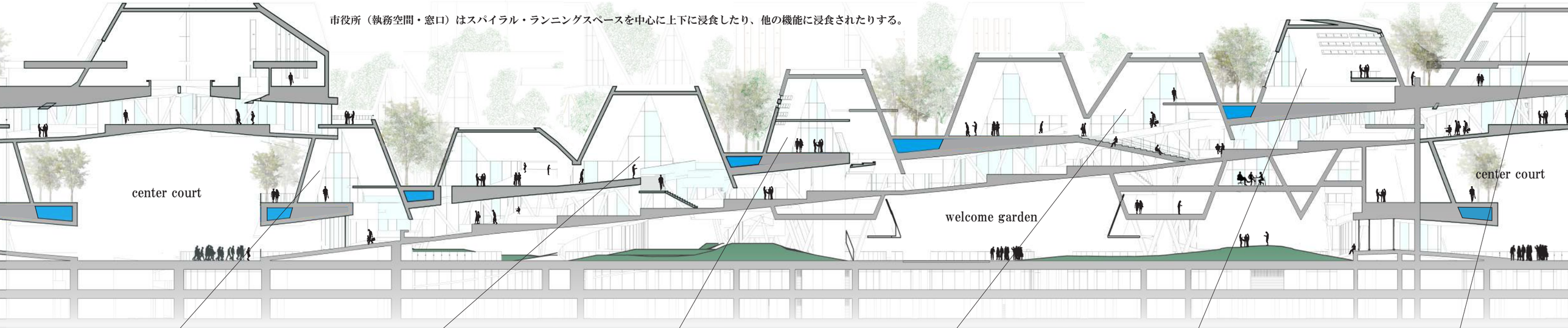
★あらゆる活動を許容する場ースパイラル・ランニングスペースー

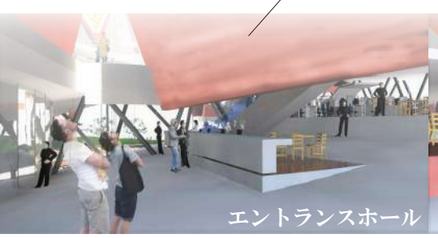
１つのユニットは上部に立ち上がる山形ボリュームと、下部に吊り下げられた谷型ボリュームがセットになる。前者は奉仕される空間であり、後者は奉仕する空間である。その間を取り持つのが、斜床の連続平面として全体を貫く幅 25mの「スパイラル・ランニングスペース」である。ここは平面や断面という括りを超越した動線ゾーンであり、円弧の性質を利用して最も内側では階段、最も外側では 1/12 勾配のスロープへと変貌し、そのニーズに併せて移動方法を変化させる。ここは構造的にもトラス梁として重要な役割を果たす他、人だけでなく物資の移動も行う、包括的で、漸次的に変化するスケール・スピードを持った動的空間である。ここは完全なパブリックスペースとして常時開放され、地表面からめくれ上がったもう一つの公園のような場所である。

市役所筋よりアイストップとなる北立面を見る

巨大な交通網の中枢である大供交差点から建物の投影線をセットバックするのではなく、ピロティという境界空間をもって敷地境界線に限りになく近づいていく「街に歩み寄る建築」とすることでかつての権威の象徴としての美術館・庁舎建築からの脱却を図った。

市役所（執務空間・窓口）はスパイラル・ランニングスペースを中心に上下に浸食したり、他の機能に浸食されたりする。

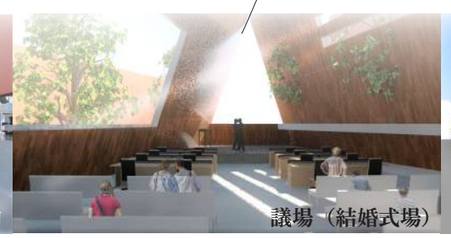



エントランスホール

市民窓口と現代展示室

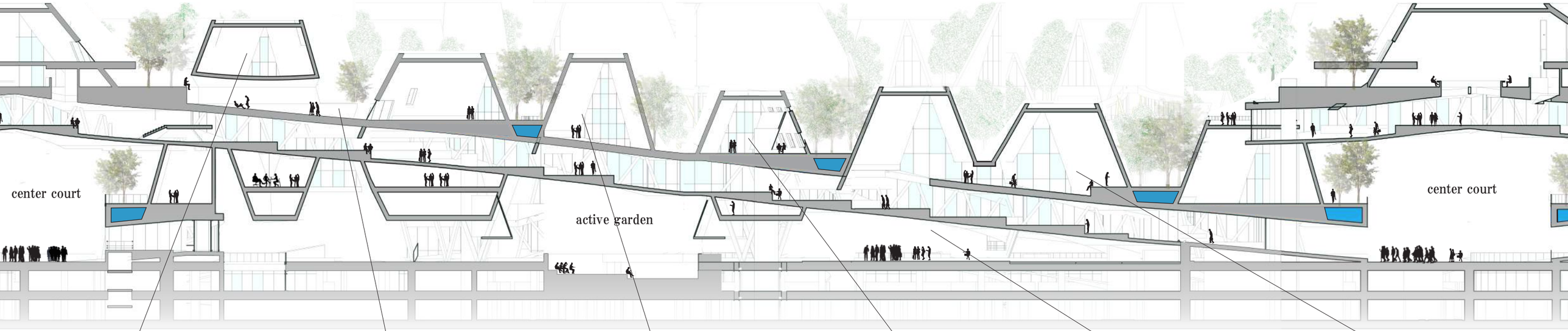
ものづくり LAB

恒久展示室入口


議場（結婚式場）

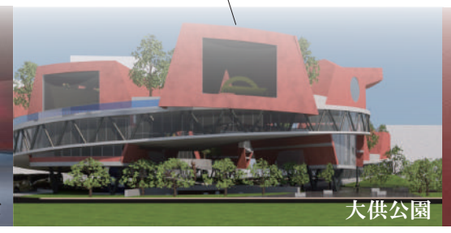
大食堂

空間体験を表す断面展開図

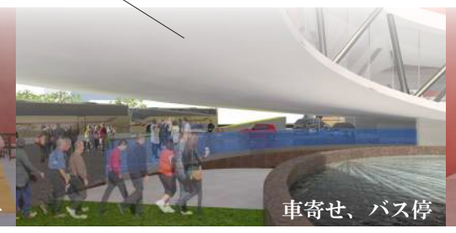


小ホール

子ども図書館


大供公園

健康相談センター


車寄せ、バス停

常設展示室

GLPLAN

開放された地上階

地上階ではスパイラルの下端が手を差し伸べるように２か所接地し、メインエントランスとしている。フットプリントの小さなこの建築は地上階に公園のようなおおらかさをもたらし、南北二つの中庭を中心に人の流れを操作している。高さが漸次的に変化していくピロティを活かして、車寄せやバス停、搬入口等交通動線は東西にまとめている。市役所筋からの交通を受け止める動線としての歓迎の北庭には動線に沿うような円形サンクンガーデン、そして大供公園と連続し、光あふれる振興の南庭には円形水盤と階段状サンクンガーデンを配置し人々が滞留できるような居場所を創出している。南北の円弧共に中心を「空」とすることでそのボイドが人々をおびき寄せる装置なのである。これこそが建築「空間」の役割ではないだろうか。

スパイラル・ランニングスペースの空間構造は静止画では伝わりにくいです。動画で見ていただけると、その様子がよく把握できるかと思います。（プレゼン動画 QR→）